山口大学教育学部研究論叢　第73巻　265頁～274頁　2024年1月

子どもの姿に基づく保育を共有するための園内研修

中島　寿子*

Nursery Teachers' Sharing of Early Childhood Care and Education Based on Children in Their Classes During In-service Training

NAKASHIMA Hisako*

（Received September 29, 2023）

本研究は、保育者が子どもの育ちや保育の過程を言語化して他の保育者と共有し、「子どもにとってどうか」という視点から保育を検討するために、どのような園内研修に取り組むとよいか検討した。保育園のクラス主担任保育者を参加者とした園内研修に取り組んだ結果、以下の内容が効果的であった。１.「子どもの主体的な遊び」をテーマとし、同じ参加者で継続的に取り組む、２.日々の保育をもとに書いたエピソード記録を取り上げる、３．エピソード記録を書いた保育者の問題意識をふまえた話し合いをする、４．ＳＯＡＰの視点や「具体化を促す問い」を意識して取り組む、５．園内研修後に毎回ポートフォリオ記録を書く。園内研修に参加した保育者間で共有したことを、同じクラスの担任保育者とも共有するための方法の検討が、今後の課題となった。

Ⅰ　問題と目的

Ⅰ－１　保育の質の向上のための取り組み

現在、世界的に保育の質が問われており、保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会の「議論のとりまとめ」(2020）においても、子どもの育ちや保育の過程を言語化し、保育実践に日頃触れない人にも保育所保育についての理解を共有することや、保育内容等の評価や研修等の取り組みについて常に「子どもにとってどうか」という視点から検討すること、その土台となる日々の保育の振り返りや対話、記録の充実を図ることの重要性が指摘されている。

保育者を対象とした調査（ベネッセ教育総合研究所，2019）においても、実践上の課題である「保育者の資質の維持、向上」のために必要なこととして「園内研修の内容の充実」が回答の上位に挙げられている。しかし、多くの園で開所時間が長くなり、保育者の労働時間もさらに増加する中で、園内研修の時間の確保が課題となっている状況にある。そのため、子どもの育ちや保育の過程を言語化して園内で共有することも容易ではない場合が少なくない。このような状況の中で園内研修に取り組むならば、どのような内容にするとよいのだろうか。

Ⅰ－２　エピソード記録を取り上げる

日々の保育の振り返りや対話をする際には、その日の子どもや保育の中で特に心に残ったことを話題にすることが多い（津守，1997)。また心が動いたことを残すのならば、どのような記録の様式であっても、エピソードが記録の中心になるだろう（河邉，2019ａ)。

このようなエピソードをもとにした記録の方法に、「エピソード記述」(鯨岡・鯨岡，2007）がある。「エピソード記述」はエピソードの「背景」も記し、「背景」をふまえた考察をするが、このことは、その保育者がエピソードで何を伝えたいのかを自覚し、エピソードをもとに保育者同士で話し合う際の視点をもつためにも重要である。

エピソード記述を取り入れたカンファレンスの試みもあり（岡花他，2009)、以下のことを明らかにしている。

・エピソード記述によって、保育者自身が抱える問題意識がより明確となり、その子どもについての理解の枠組みが意識化される。
・カンファレンスによって、エピソード記述では十分でなかった保育者の思いや意図の言語化ができることがあり、「描くこと」「話すこと」両面のメリットがある。

＊ 山口大学教育学部，〒753-8513　山口市吉田1677－1，hisako-n@yamaguchi-u.ac.jp

このように、記録をもとに話し合ったり、話し合ったことをもとに記録を書くことを繰り返していくことは、子どもの育ちや保育の過程を言語化し、園内で共有するためにも、保育の内容を「子どもにとってどうか」という視点から検討するためにも不可欠である。園内研修も、このように日々の記録に基づく内容にする必要がある。

Ⅰ－３　「ＳＯＡＰ」の視点を活用する

河邉（2019ab）は子どもの姿に基づく保育の過程を考えるための記録の視点「ＳＯＡＰ」を提案している（表１参照）。そして、この思考過程の獲得のためには、ＳＯＡＰの視点を取り入れて記録を書き続ける必要があると述べている（河邉,2019ｂ）。

ＳＯＡＰの視点を取り入れた園内研修の例もあり、関岡他（2020）は園内研修で他園の実践記録をＤＶＤで視聴してＳ、Ｏ、Ａを記入することを試みている。すると、Ｓ、Ｏについては具体的に書き出す経験となり、子どもの経験と保育者の願いのつながりを意識するようになったが、Ａを導き出すことは難しかったという。この思考過程の獲得のためには、河邉（2019ｂ）が述べるようにＳＯＡＰの視点を取り入れて記録を書き続けていく必要がある。また、園内研修で子どもの育ちや保育の過程について話し合う際にも、この視点を意識していく必要がある。

表１　保育記録に取り入れたい視点「ＳＯＡＰ」
（河邉，2019ab）

S：Subjective Data （幼児の姿）	・誰と誰が、どこで、何をして遊んでいたか ・どのような人間関係が見られたか ・環境とどのように関わっていたか
O：Objective Data （読み取り）	・どこに面白さを感じていたか ・**どのような経験**をしていたか ・何か育っていると考えらえるか
A：Assessment （願い）	・**どのような成長**につながりそうか ・次は**どのような経験**が必要になるか
P：Plan （環境の構成）	・次の**成長を促すため、必要な経験が満たされるために**どのような環境構成や援助が必要か

Ⅰ－４　「具体化を促す問い」を活用する

「子どもにとってどうか」という視点から保育を検討するためには、教師教育プログラムとして開発された省察サイクルである「ＡＬＡＣＴモデル」（Korthagen et al.,2001）の活用も有効だと考えられる（図１参照）。

このサイクルの第１局面は「行為（Action）」で、第２局面でその「行為を振り返る（Looking back on the action）」。その中で第３局面の「本質的な諸相への気づき（Awareness of essential aspects）」に至れば、第４局面の「行為の選択肢の拡大（Creating Alternative methods of action）」へとつながり、第５局面で「さらなる試み（Trial）」が行われるというものである。

ＡＬＡＣＴモデルでは、第３局面の「本質的な諸相への気づき」に至るために、第２局面の「行為の振り返り」において、「自分」と「子ども」の行為、考え、感情、願いについて振り返るための「具体化を促す問い」を用いることに特徴がある。この問いをワークシート（表２参照）にして保育実践についての協同的省察に取り入れた例もあり（村井他,2020）、保育者が「自分」と「子ども」との感情のずれに気づくことが「本質的な諸相への気づき」に至る上で最も効果があったという結果を得ている。この結果からも、「具体化を促す問い」は、園内研修の中で「子どもにとってどうか」という視点から保育について検討する際にも、有効であると考えられる。

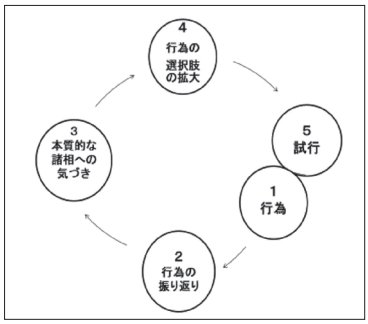

図１　ＡＬＡＣＴモデル（Korthagen et al., 2001）

表２　保育者同士での省察に用いるワークシートの様式
（村井他，2020）

０　できごとの様子	
１．わたしは何をしたか	５．子どもは何をしたか
２．わたしは何を考えていたか	６．子どもは何を考えていたか
３．わたしはどう感じていたか	７．子どもはどう感じていたか
４．わたしはどうしたかったか（何を望んでいたか）	８．子どもはどうしたかったか（何を望んでいたか）

Ⅰ－５　本研究の目的

以上の先行研究もふまえた本研究の目的は、以下の通りである。

１．エピソード記録をもとに話し合う園内研修を実施し、筆者も参加してＳＯＡＰの視点（河邉，2019ab）と「具体化を促す問い」（Korthagen et al., 2001）を活用した支援も行う。

２．園内研修に参加した保育者は、子どもの育ちや保育の過程を言語化して園内で共有すること、「子どもにとってどうか」という視点から保育を検討することにどのような変化が起こり、その変化にはどのような園内研修の内容が関係したのかを明らかにする。

Ⅱ　研究の方法

Ⅱ－１　研究協力者

筆者がこれまで園内研修に参加してきた保育園の保育者に研究協力を依頼した。園長に本研究の趣旨と内容について説明して内諾を得た上で、０歳児クラスから５歳児クラスまでの主担任の保育者６名（表３参照）に、本研究の目的、方法、個人情報の保護等について口頭と文書で説明をして、研究協力について依頼をしたところ、全員から文書での同意を得ることができた。

園内研修には、主担任の保育者と筆者の他に、園長、主任も参加した。

表３　園内研修に参加した主担任の保育者

クラス	保育者（保育経験）	担任保育者数
０歳児	A先生（30年目）	年度末には２グループ（２名、４名）計６名
１歳児	B先生（17年目）	２グループ（各２名）計４名
２歳児	C先生（25年目）	２グループ（各２名）計４名
３歳児	D先生（16年目）	２名
４歳児	E先生（21年目）	２名
５歳児	F先生（９年目）	２名（主担任以外の２名は一日の途中で交代）

Ⅱ－２　園内研修の方法

この園の園内研修では子どもの主体的な遊びについて考えてきたため、本研究の園内研修のテーマも「子どもの『主体的な遊び』とそのための環境構成・援助について考える」とし、202X年度に６回実施した（１回の所要時間は１時間半～２時間程度）。

第１回から第５回は表４のように進めた。第６回は園内研修の中での自分の変化とその理由、エピソード記録をもとに同じクラスの担任保育者に伝えたいこと、そのための方法について話し合った。

筆者は毎回の園内研修時にＳＯＡＰの視点と「具体化を促す問い」の関係を整理した資料を配布した（表５参照）[注1)]。園内研修の中でもＳＯＡＰの視点と「具体化を促す問い」を活用した支援をした。

園内研修後には、保育者にポートフォリオ用紙への記録をしてもらった（表６参照）。

なお、本研究については、本学の学内委員会で倫理審査を受けて承認を得ている。

表４　園内研修の方法

園内研修前	・各保育者が日々の保育をもとに取り上げたいエピソード記録を以下のようにまとめる。 **「エピソードを取り上げた理由・みんなで検討したいこと」「エピソード名」「エピソード」「考察」**
園内研修	・各保育者の「エピソードを取り上げた理由・みんなで検討したいこと」もふまえて、**エピソード記録をもとにした話し合い**をする。 ・筆者はＳＯＡＰの視点や「**具体化を促す問い**」を活用し、**子どもの姿に基づく保育プロセスを言語化するための支援**もする。 ・園内研修の内容はＩＣレコーダーで記録する。
園内研修後	・各保育者が「**気づき**」「**気づきをその後の保育にどのようにいかしていきたいか**」**をポートフォリオ用紙に記録**する。 ・筆者が逐語録をもとに園内研修記録を作成し、保育者に渡す。 ・**園内研修記録**と**ポートフォリオ記録**の内容もふまえて、園長・主任・筆者で相談しながら**次の園内研修の計画**をする。 ・次の園内研修で保育者に渡せるように、筆者が全員のポートフォリオ記録の内容もまとめる。

表５　「具体化を促す問い（８つの問い）」とＳＯＡＰの視点

１．私は何をした？	doing	５．○ちゃんは何をした？	←S（幼児の姿）
２．私は何を考えていた？	thinking	６．○ちゃんは何を考えていた？	←O（読みとり）
３．私はどう感じていた？	feeling	７．○ちゃんはどう感じていた？	
４．私はどうしたかった？（何を望んでいた？）	wanting	８．○ちゃんはどうしたかった？（何を望んでいた？）	
			A（どのような経験をしてほしいか）
			P（そのためにどのような環境構成・援助をしていきたいか）

表６　ポートフォリオ記録用紙の様式

日　付	気づき	気づきを今後の保育にどのようにいかしていきたいか	備考
○月○日（○） 第１回園内研修			
○月○日（○）			

Ⅱ－３　考察の方法

エピソード記録、園内研修記録、ポートフォリオ記録をもとに、保育者が子どもの育ちや保育の過程を言語化して園内で共有すること、「子どもにとってどうか」という視点から保育を検討することにどのような変化が起こり、その変化にはどのような園内研修の内容が関係したのかについて考察する。

Ⅲ　園内研修の実際

一年間の園内研修の実際について、話し合いの時間を多くもった２歳児クラス、５歳児クラスを中心に取り上げながらまとめた。エピソード記録は概要をまとめたものを取り上げ、本文と特に関連している部分には下線を引いた。

Ⅲ－１　第１回園内研修（５月）

各保育者にエピソード記録を読んで紹介してもらった後、物を投げてしまう子どもの姿を「どのように考えて対応すべきか迷う」と記述していた２歳児クラスのエピソード記録を取り上げて話し合った（表７参照）。

表７　第１回園内研修エピソード記録の概要（２歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 いろいろなことに興味・関心を持つ子どもたち。要求や願いを満たしながら、いろんな経験ができると良いと思っているが、叶えられないこともある。危ない時やおもちゃや道具が壊れてしまいそうなことも多く、禁止や注意が多くなってしまう。どのように考えて対応すべきか迷う毎日である。
【エピソード】　４月27日「投げたくなって何でも投げてしまう」 電車をブロック等で作った線路で走らせていた子どもが、他に興味が移っていなくなる。a男・b男がそれを拾って投げ、床や壁にぶつかった。投げてはいけないことを話して聞かせた。 担任間でどのようにしていくか話し合った。すぐ取り組めることとして新聞紙で玉を作り、簡単な的（オバケの絵）に投げて遊んでみると、とても上手に投げて楽しんでいた。おもちゃを投げてしまう時は、的あてに誘うようにした。５月中旬になると、また電車を投げる姿が見られた。大きさや重さが投げるのに心地良いのだろうか。
【考察】　おもちゃが発達に合っているか。遊びのコーナー作りはできているか。子どもたちがやりたい遊びがあるか。

エピソード記録だけでは保育を見ていない筆者にはわかりづらいことをＣ先生に質問して、語ってもらった。

他の保育者からも、２歳児クラス担任経験から考えたこと、自分だったらどのように対応するか、それはなぜかが語られた。担任保育者間で考え方が共有されていないことも窺え、連携して小グループでゆったり関わることが必要ではないかと語る保育者もいた。

園内研修後、ポートフォリオにＣ先生は「誰が読んでもわかる記録という点が欠けていた」「自分の思いを他の保育者の前で率直に話すことができなかった」と記録していた。また、２歳児クラスと同様に担任保育者数が多い３歳未満児クラスの保育者は、自分のクラスでは担任間での共有ができているだろうかと記録していた。

Ⅲ－２　第２回園内研修（７月）

各保育者がエピソード記録に補足して語ることが増えた。筆者はわかりづらいことを質問して答えてもらいながら、そのことも書くとわかりやすいと伝えていった。

２歳児クラスのエピソード記録では、外遊び後の保育室の遊びから給食に気持ちが向かない子どもたちに「また悩んでいる」ことが記述されていた（表８参照）。

表８　第２回園内研修エピソード記録の概要（２歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 友達と一緒にいることが心地良くなったのだなと感じた場面だった。一方で、それを満足するまでさせてあげられなかったことを残念に思う。楽しいことをたくさんして、終わりにする、また次にしようと切り替えること、みんなで「いただきます」の挨拶をして食卓に向かうこと等、時と場合によると思うが…。また悩んでいる。
【エピソード】　７月６日「楽しそうに遊ぶことも保障したいけれど」 戸外からシャワーをして室内に戻り、それぞれ好きなおもちゃで遊んでいた。どの子も友達と一緒がとても心地良い様子であった。 給食の時間が近づき、「もうすぐ給食だよ。お腹すいたね」と声をかけたが、無反応。（少しして）保「トントントン、こんにちは」子「はーい」保「ここはお家ですか？」子「ううん、バス」保「バスなの？どこに行ったの？」子「えっとね、どうぶつ（どうぶつえん）」保「楽しかったね。そろそろ帰っておいでよ」子「いやー」保「いっぱい遊んでお腹すいたね」子「うん」「すいてなーい」 「じゃあ、お腹すいてるみんなでお片付けして給食にしよう」と言うと、２～３人が片付け始め、つられて数人が動き始めた。ｃ子、ｄ子、ｅ男、ｆ子は遊んでいる。「早くおいでね」「ご挨拶するよ」と声をかけたが、知らん顔。仕方なく「お先にご挨拶するよ」と声をかけ「いただきます」をすると、慌てて片付けもせず手を洗いにきた。
【考察】　とても居心地のよい遊びの空間でずっと遊んでいたい気持ちも受け止めたいと思い、時間いっぱいまでは待って挨拶をするが、待てないこともある。この年齢で何を大事にするのか考えたい。

筆者がＣ先生に質問しながらこの場面の状況について確認していき、子どもたちの側から考えると、保育室で遊ぶことができた時間とここでの姿に関係はないのだろうかと問いかけた。Ｃ先生は確かにあるかも知れないと語り、ポートフォリオに「私の中では合間の自由な遊びという感覚でしかなかった」と気づいた、一人一人の遊びをよく見ていきたいと記録していた。

５歳児クラスでは、虫は捕まえるが自分たちで育てる意識があまり感じられない子どもたちのエピソード記録（表９参照）をもとに話し合った。５歳児であるため、担任経験がある保育者が多く、３・４歳児クラスでの担任保育者からは当時の子どもたちが虫と関わる姿、その姿から読み取ったこと、「やってもらうのを待つことが生活のいろんな場面で感じられた」こと等が語られた。

表９　第２回園内研修エピソード記録の概要（５歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 生き物を飼うことの意味や大人がどこまで介入すべきか、調べることや経験することの難しさを感じているから。
【エピソード】「虫を飼いたい」 ６月15日　カミキリムシを捕まえる。何を食べるか調べると、木の皮樹液等、種類によって違うと分かった。A男、B男、C男中心で虫かごに環境を作って飼った。１週間ほどして動かなくなっているのに気付き、ミニ園庭に埋めている。
６月17日　公民館で遊んだ時にD男がカマキリを見つけ、興奮して持ってきた。園に持ち帰り、飼うことにした。男児中心にとても喜んでいた。
７月　カマキリを見つけて飼い始める。少し成長していて見やすいからか虫かごを覗き込む子が多かった。E男が家から餌のバッタを持ってきたが、大きくて食べられなかったようだ。他児もバッタを入れていた。
７月12日　カマキリの足が無くなっているのに気付き、かわいそうなので逃がした。
【考察】　カマキリを見つけた時はとても喜んでいた。飼いたい気持ちが強いが、まだ育てる意識とは違うのかなと感じている。少人数でも興味のある子で進めていく方がいいと分かった。活動を通して関心を持ったり調べたり、伝え合ったりする姿は見られる。

筆者がＦ先生に気になることは虫だけの話なのか問いかけると、他の場面でも「もうこれでいい」で終わるＣ男の姿等が語られた。そのため、この子どもたちが育つために生活全体をみんなで一緒に見ていき、援助のタイミングやチャンスを考えていこうと提案した。

最後に筆者は、第１回よりも具体的な子どもの姿をもとに話し合えたので、エピソード記録に子どもの名前を具体的に書いておくと話し合いやすいと思うと伝えた。

Ⅲ－３　第３回園内研修（９月）

エピソード記録に子どもの名前や場面、会話等が具体的に書かれ、さらにわかりやすくなった。

５歳児クラスでは、第２回で取り上げた子どもの変化を記述したエピソード記録をもとに話し合った（表10参照）。Ｆ先生からは、「もうこれでいい」で終わる姿があったＣ男が砂場の遊びに打ち込み、その後、リーダーシップをとることが多いＦ男の遊びに入らなかったり自分から意見を言うようになったりと「少し変わってきた」と感じていることが語られた。

他の保育者もこの子どもたち一人一人について質問していき、日頃見ている姿、担任時の姿も語っていった。

砂場の遊びを支えるためにもっとできる援助があったのではないかと語るＦ先生に、その場面についてさらに語ってもらう中で、この子どもたちの課題として「お互いの話を聞き合うこと」が挙げられた。そのために今後どのような保育をしたいか尋ねると、日によってリーダーを変える小グループでの話し合いに取り組み始めたことが語られた。筆者は、その試みが子どもにとってどのような経験となり得るか考えたことを伝えた。

表10　第３回園内研修エピソード記録の概要（５歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 「自分が楽しければいい」から変わりつつある姿だと感じた。少し不完全燃焼で遊びが終わり、もう少し何かできなかったかと感じている。
【エピソード】「手伝ってほしい！」 ８月22日　（略）
８月23日　夕方にＦ男、B男、C男、D男、G男で砂山にらせん状の溝を掘り、水を流そうとしていた。F男が帰ると、溝を上手く斜めにできず最後まで溝を掘るか途中で池を作るか等、話がまとまらない。 「明日Ｆ男君に聞いてみよう」という話も出たが、C男は不服そうだったので、保育者も加わってみんなで話をした。最後まで斜めにするという計画だったとわかったので、「掘り過ぎたところは砂で埋めたらいいよ」とアドバイスし、計画通りにやってみることになった。 しかし、その後、最後までしていたのはC男のみだった。
【考察】　リーダーになることが多いＦ男の言う通りになることがほどんとで、なかなか話し合いにならない。他の子も考えたり意見を言ったりすることがまだ少ない。この遊びの後、C男は少し変わってきたと感じている。Ｆ男の遊びに入らなかったり、意見を自分から言うようになったりしている。いいきっかけになったのだと思う。

ポートフォリオに、Ｆ先生は「前回も出た子を取り上げ、子どもの成長や変化を感じることができた」「たくさんの質問を受けた。もっとわかりやすく伝わるように書いていきたい」「その子の背景や自分自身のことも入れたり考えたりしていきたい」と記録していた。他の保育者の多くも５歳児クラスを取り上げ、担任していた子どもの成長や友達関係の変化を知ることができた、これから関わる時に参考にしたい等、記録していた。

最後に筆者は、保育の中で大事にしていることを言葉にしないことがあるので、このような質問をしており、質問されると予想できることも書くと、さらにわかりやすくなると伝えた。この話を受け、ポートフォリオに、同じクラスの保育者にも「言葉足らず」になっているかも知れない、自分では気づかないこともあるので「どう思った？」と聞いていきたいと記録した保育者もいた。

Ⅲ－４　第４回園内研修（11月）

エピソード記録に子どもの姿についての読み取りと願いも明確に記述されるようになってきた。そのため、筆者は園内研修の始めに、ＳＯＡＰと「具体化を促す問い」（表５参照）をさらに意識して考えること、どのエピソード記録についても話し合えるように、各クラスで同じ時間をとり、まず保育者同士で聞き合うことを提案した。すると、エピソード記録で取り上げた場面や状況、その子どもの日頃の姿、それまでの姿等についての質問が増え、自分が見たその子どもの姿や状況も担任保育者に伝えるようになった。

５歳児クラスでは、これまで取り上げた子どもたちを中心にサッカーが得意な者が同じチームになるための「作戦会議」をする姿が取り上げられた（表11参照）。

表11　第４回園内研修エピソード記録の概要（５歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 子どもの成長を感じたが、成長ゆえに注意しないといけないことが増えてきたと感じているから。
【エピソード】 10月28日 「サッカー？の作戦会議」 サッカーをする子が増えたので、ゴールを２つ用意するとチームに分かれて遊ぶようになった。午後のおやつ後、外に出る前にF男、B男、D男、G男がお手玉をしながら部屋の隅に集まり、話していた。 H男がお手玉の仲間に入れてほしいと近づいたが、F男がH男を絵本コーナーに連れていく。H男に話を聞くと、サッカーの話をしていて、今聞いたら入れてやらないと言われ、待つことを受け入れたようだった。 ４人に事情を聞くと、F男が「作戦会議をしているから聞かれたくない」と言う。B男、D男はバツの悪そうな顔をしている。詳しく話を聞くと、４人で同じチームになるよう仕組もうと考えていたようだ。F男が主になって話を進め、B男、D男は少し後ろめたさを感じ、G男はよく分かってないようだった。知らない所で自分が同じことをされたら嫌じゃないのか聞くと、皆黙り込んだ。 外に出て同じチームになってサッカーをしたが、G男が早迎えでいなくなり、４歳児も一緒だったので、上手くはいかなかったようだ。
【考察】 F男、G男はサッカーを習い、D男は得意としている。同じチームになりたい（一緒に遊びたい）気持ちは小さい時から持っていると思う。それが勝つためだったり、ばれないようにしたりと色々と考えていたので少し感心したが、周りが成長して理解が進んでくると、トラブルになるかも知れないと感じた。

表12　第４回園内研修エピソード記録の概要（２歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 春頃から、時ならない時に園庭に飛び出していく子どもたちだが、一人一人行こうとする理由やきっかけは違っていると感じていた。子どもの姿や思いに変化を感じ、このエピソードを取り上げた。
【エピソード】「お山で お水ジャーってながしたいの」 10月17日　室内で好きな遊びをしている時、e男、g男、h男が園庭に出た。h男は砂場をスコップで掘っていた。 その後外に出ると、h男はまだ砂場にいた。保「何作ってるの？」h「お山だよ。お水するの」保「先生も一緒にしたいな」h「いいよ」g男も加わって山を作り、出来上がると、足洗場から水を汲んで運んでは流すことを繰り返していた。
10月28日　午後のおやつ前にg男、i男が園庭に出ていった。自分から戻っておやつを食べられると良いと思い、声をかけたが、戻って来なかった。g男はしばらくすると砂場へ行き、スコップで穴を掘り始めた。保「穴掘ってるの？」g「うん。お山作って、お水ジャーッて出る（流したい）の」保「お山の中にホース入れてジャーッて出すの？」g「うん、そーそー」。とてもうれしそうに話していた。
【考察】 夏に砂山の中にホースを埋め、山のてっぺんから水が飛び出す遊びをとても喜んでいた。プールが終わった９月、g男がこの遊びをしたいと誘うようになった。h男はこの頃から外に出れば砂場へ行きスコップで砂を掘っていた。やりたいことがあって外に出ているのかも知れないと思った。10月28日にg男も同じような姿を見せた。“何度かした遊びをまたしたい”という思いを持っていることにやっと気づけた気がする。

子どもたちの成長を確認し合うとともに、特定の子どもの意見が通ってしまう等の課題についても話し合った。他の保育者もこれまでの担任経験をもとに一人一人の子どもについての読み取りや願いを語っていった（「自分のこととして受け止めない感じ」のG男や、F男をこわいと思っているD男について、F男の意見ばかり通らない機会をどのように作ることができるか等）。

話し合いの中で、他の場面でも集まって話す姿を見たという保育者もいたため、筆者は、保育者も情報共有をしながら「作戦会議」をして、意見をあまり言わない子どもたちも育つように考えていこうと提案した。

ポートフォリオに、F先生は「分かりやすくエピソード記録を書いたつもりだったが、実際言葉にして伝えると更に言葉が出てきて情報が多くなっていった」「子どもの姿を見て、それからどう関わっていくか、何を伝えていけばいいか等、もう一つ踏み込んで考えていく必要がある」と記録していた。

２歳児クラスでは、第２回での気づきをもとにC先生が子どもの姿をよく見ていく中で、さらに気づいたことを記述したエピソード記録をもとに話し合った（表12参照）。C先生は「時ならない時に園庭に飛び出していく子どもたち」には「やりたいこと」があるのかも知れないと思うようになり、一緒に遊ぶ中で「“何度かした遊びをまたしたい”という思いを持っていることにやっと気づけた」と記述しており、「こんなふうに考えられたのは、すごく自分の中で大きかった」と語っていた。

他の保育者も、これまで見てきたこの子どもたちの姿（自分のクラスの方まで来るが、声をかけるといなくなり、その後また戻って来る等）を伝え、「あれもきっと理由があるんだろうな」とその場の状況を思い起こして語っていき、何を考えての行為だったのか考え合った。

ポートフォリオに、C先生は「質問をたくさん受けることで、自分の記録の足りないところや自分の考えの及んでいないところに気づくことが多い」「記録する際に生かしたり、保育者同士の伝え合いをもっと大切にしたい」と記録しており、他の保育者も「子どもの様子を話す機会をもつことを続けていきい」、「ちょっとした子どもの姿を話して共有していきたい」と記録していた。

Ⅲ－５　第５回園内研修（１月）

２歳児クラスのエピソード記録には、第４回でも取り上げていたh男（表12参照）が、園庭で大きな「砂あつめ」（図２参照）を両手で持って走る姿、「自分のやりたいことは大事にしたい」が「危ない時には代わりになる物を用意したり、違う遊びに誘ってみたくなる」という悩みが記述されていた（表13参照）。

このエピソード記録をもとに、h男にとってのこの遊びの楽しさについて考え合った。これまでの担任保育者からは、「昔」は砂集めを「地面に押しつけてズズズとしていた」姿等が語られた。C先生もそのように「春頃はしていた」が、ある日砂集めを毎日持っていることに気づき、「道」を走る姿を見て、「道を走る時に持つのか

表13　第５回園内研修エピソード記録の概要（２歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 数日前から「外で何して遊ぼうか」と言うと、h男が「道かく」と言っていた。砂場でスコップで山を作ることが多かったが、今は砂あつめを持って走る。自分のやりたいことは大切にしたいが、危ない場合は、代わりの物を用意したり違う遊びに誘ってみたりしたくなる。
【エピソード】 12月12日 「えっとね、えっとね、カーブ曲がるの」 戸外に出ると、h男は砂あつめを取りに行き、「みちかいて」と言うので、やかんで水ラインをかく。2/3くらいかくと、h男は砂あつめを両手で持って走り出した。スピードが出ると危ないと思い、声をかけた。 保「h君、おもちゃはおいて走ったら？こけた時に痛いってなるよ」h「もってはしるの！」保「そうなの」「ドシンッてぶつかったりしたら痛いよ」h「いたくないの！」 保（砂場に誘おうとして）「おててに持ってるのはなあに？ブルドーザーみたいなの？」h「ちがうよ。えっとね、えっとね、これカーブ曲がるの」保「ハンドル？こうやって運転するやつ（運転するふりをして）？」h「うん、そう！」保「へー」楽しい発想だと感じた。 「あんまりスピード出さないでね」「気をつけて」と声をかけた。 その後、広告紙でハンドルを作って勧めてみた。h「いらん。これがハンドル！」h男は砂あつめを持ち、道をひたすら走っていた。
【考察】 物を持って走るのは危ないとばかり言ってしまうことが多かったかも知れない。子どもの思いをしっかり聞いてどうすれば気持ちに寄り添えるのか考えたい。切り替えがよくない子ではあるが、そういった強い思いほど大事にしないといけないのだろうなと思った。

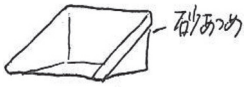

図２　「砂あつめ」（Ｃ先生のエピソード記録より）

な」と思ったと語っていた。

その後も、h男と同じ動きをしてみたりしながら、h男にとってのこの遊びの楽しさについて話し合った。最後に、筆者はこれまでのh男の遊びが「何をしているか」は違っていても、「この子どもの中ではつながってるんじゃないか」と見ていくと面白いのではないかと伝えた。

ポートフォリオに、Ｃ先生は「共に保育をする仲間に、今している、これからしたいと思っている環境づくりや保育への自分の思いを伝えることの大切さを改めて感じる」「独特な感性やこだわりを持つ子どもの本当の願いや思いを聞きながら、担任間で共有して大切にしていきたい」と記録していた。

５歳児クラスでは、ある子どもが「バスケット」を始めたことをきっかけに、これまでサッカーを楽しんでいた子どもたちが「バスケット」を始めたこと、その中で「ルール違反を互いに指摘して受け入れたり、遊びながらこの場合はどうするかと、ルールを決めようとする」等の成長した姿が見られたことについて語られた（表14参照）。

他の保育者からの質問に答える中で、Ｆ先生からこれまでサッカーをしたかったがあまりしていなかった子ど

表14　第５回園内研修エピソード記録の概要（５歳児クラス）

【取り上げた理由・みんなで検討したいこと】 ほとんどの子どもがルールを知らない状況から遊びが始まり、必要なことを伝え合っていた。だが、このままでは皆で楽しめるようになるのは難しいかも知れないと思い、遊び方の提案を行った。大人の思いからだったが、いい結果になったのではないかと感じたから。
【エピソード】「バスケットをやってみたい」 １月11日　Ｉ子がボールをドリブルして遊んでいると、何人かが集まり、「バスケット」を始めた。兄がバスケをしているＩ子はルールに詳しく、チームにわかれてゴールを地面にかき、シュートして遊んでいた。保育者は審判を頼まれ、簡単にルールを説明しながら遊んだ。
１月12日　Ｉ子を中心に「バスケット」をして遊んだ。Ｆ男、Ｄ男、Ｈ男、Ｂ男等も加わった。ボールを持って歩かない等のルールが難しく、体がぶつかる子もいたが、夕方もやろうと言っていた。 危なさがあったため、ルールの変更を提案すると、受け入れて遊び始めた（ドリブルをしない、ボールを持つ人から取らない）。このルールではパスしないとボールが前に進まないので、チームの子をよく見るようになった。ルール違反を互いに指摘して受け入れたり、遊びながらこの場合はどうするかと、ルールを決めようとする姿も見られた。
【考察】 安全にできるようにルールを決めたが、結果的に全員が楽しめ、互いの動きや場所をよく見ることでゲームを有利に進められることが分かるような遊びになった。まだ興味がある子がやっているだけだが、クラスの活動として遊んでみるのもいいかもしれない。

もたちがサッカーを始めた姿についても語られた。

「クラスの活動としてするなら、もう少しやり方を考えないと」というＦ先生の言葉から、これまでの子どもたちのボール遊びの経験についても一緒に振り返った。その中で、一人一人の成長が語られたため、筆者は子どもが自分で選んだ遊びを楽しむ中で、一人一人に経験してほしいことに合わせて援助する方が、子どもにとってよい経験になるのではないか、クラスの活動にする必要があるのだろうかとも問いかけた。

ポートフォリオに、Ｆ先生は「子どもを『○○できないからどうしよう』から『○○するためにどうしていこう』に少し変化して見られるようになった」と記録していた。また、保育者の多くが、みんなのエピソード記録がとてもわかりやすくなったと記録していた（場面の切り取り方が上手い。場面の様子や情景、子どもの姿や気持ち、保育者の思いが詳しく書かれている。子どもの変化、成長を感じられる。子どもの発達に合わせた援助が伝わる等）。

Ⅲ－６　第６回園内研修（３月）

Ⅲ－６－１　園内研修の中での自分の変化

始めに、各保育者が事前にレポートにまとめた「園内研修の中での自分の変化」「その理由」について報告し合った。表15は２歳児クラスＣ先生、表16は５歳児クラスＦ先生のレポートの一部をまとめたものである。両者ともエピソード記録を書くこと、エピソード記録をもと

に話し合うことで、自分の中にある子どもの見方を問い直していた。C先生は日頃の保育の中でも「伝えなくてはいけない大事なことを伝えられるようになった」という自分の変化も捉えていた。また、C先生は「共感により安心」できた、F先生は子どもの成長を確認できて「気持ちは楽になった」と記述しており、自分のクラスの子どもたちの姿や保育について他の保育者と語り合うことが保育をする上で支えとなってきたこともわかる。

表15　第６回レポートからの抜粋（２歳児クラスC先生）

自分の変化	・ＳＯＡＰを意識することで、その場面の状況、子どもの思い、自身の思いも整理できた。 ・研修の中でいろいろな質問を受ける中でも整理され、気づいていない、伝わっていない大事なことに気づくことがあった。次のエピソード記録を書く時に足りないことに気づくことも増えた。 ・研修以外の場面でも、以前よりも伝えたいことを伝わりやすく話そうと気をつけることで、共感し合えたり、伝えなくてはいけない大事なことを伝えられるようになったと感じることがある。 ・子どもの姿を理解する目が変わったように思う。“よくわからないけど、これが発達の姿”などと漠然とした答えを持つだけだったが、みんなと共有することで、反省し、自分の保育を振り返ったり改めたりしたり、共感により安心したりすることができた。
理由	・読む人がわかりやすいようにと意識しながら、子どもの姿から子どもの思いを想像してエピソード記録を書いていく中で、子どもの理解も進み、より具体的に書くことができるようになった。

表16　第６回レポートからの抜粋（５歳児クラスF先生）

自分の変化	・エピソード記録をとる中で、個人だけでなく集団で見られるようになってきた。連続して見ていったので、育ちを感じやすくなった。 ・子どものいいところを前より見るようになったと思う。
理由	・記録を書く中で、どうしてもできなかったことや、問題と感じたことを主に書いていることに気づいた。 ・だが、前の記録を見返したり、先生達からの意見をもらうと成長していることが分かり、少し気持ちは楽になった。少し余裕がもてたのかもしれない。

他の保育者のレポートでも、エピソード記録を書く中での自分の気づきや変化についての記述が多かった。また、他の保育者のエピソード記録を読み考えることも、保育の中で子どもの思いや気持ちを考えることにつながったのではないかと記述した保育者もいた。

他の保育者による記述（一部）も以下に挙げる。

・０歳児クラスA先生：「子どもの主体性を意識するようになった」「子どもたちの思いを大事にし、子どもにとって必要な環境をつくったり、気になった子どもの姿から何を考えているのだろう、何がしたいと思っているのだろうと考えるようになった」

・１歳児クラスB先生：「１歳児にとっての主体的な遊びとは何だろう」「この子は何を思っているのだろう、私の関わりに何を感じたのかなと振り返って考えることが増えた」

・３歳児クラスD先生：「子ども同士のやりとりに耳を傾けるようになった」「この子はなぜこんなことを言ったのか、したのかと考えるようになった」

・４歳児クラスE先生：「自分の保育や子どもの様子で気になることや課題が見えてきた部分があり、次にどんなことが必要なのか、こんな時はどうしているのだろうと、必要な情報を得ようと考えるようになった」

Ⅲ－６－２　エピソード記録を活用したクラス会議

園長・主任から、園内研修で学んだことを他の担任保育者と共有するためのクラス会議をしたいと提案があり、保育者としての願いがわかりやすく記述された第５回のエピソード記録を取り上げて実施することになった。そのため、第６回では「第５回エピソード記録をもとに他の担任保育者に伝えたいこと」も事前にレポートにまとめ、どのように伝えるかについても話し合った。

３歳未満児クラスの保育者は、担任保育者数が多く、他の保育者から発言がないこともあるため、事前に各自でエピソード記録をもとに考えたことを書いた上でクラス会議をしたいと語っていた。

３歳以上児クラスの保育者は、クラス会議を子どもたちのことをじっくり話す機会にしたいと語っていた。その中で、５歳児クラスF先生は、朝夕での子どもの姿の違いを一日の途中で入れかわる担任保育者にしっかり伝える必要があると考えていると語っていた（表３参照）。また、かつての自分のように「みんなで一緒に遊ぶ方がよい」と考え過ぎる担任保育者には、その子どもがしたい遊びを大切にしながら、そこに他の子どもも集まるような援助の方法もあると伝えたとも語っていた。

園長・主任も、５歳児が小グループでの話し合い等を経験する中で、行事の時に自分にできることを探して手伝おうとしたりと「周りをすごく見れるようになった」と、その成長について具体的な姿をもとに語っていた。

最後に筆者は、貴重な機会なので、クラス会議後にもポートフォリオ記録を書くことを提案した。クラス会議後のポートフォリオ記録から、以下のことを確認した。

３歳未満児クラスでは、事前にエピソード記録を読んで考えをまとめてクラス会議をすると、保育経験の少ない保育者の思いや考えも聞くことができた。この体験から、どの保育者も今後も短時間でもこのような場を設けたいと考えていた。３歳以上児クラスの保育者は、子ども一人一人の今後の保育について考え合うために、クラス会議を設けたのはよい機会になったと考えていた。

Ⅳ　考察と今後の課題

この園内研修を通して、保育者が子どもの育ちや保育の過程を言語化して園内で共有すること、保育について「子どもにとってどうか」という視点から検討することにどのような変化が起こり、その変化にはどのような園内研修の内容が関係したのかについて考察する。

Ⅳ－１　園内研修のテーマと参加者

園内研修の中での自分の変化について、低年齢児クラスの担任保育者ほど、子どもの思いや考え、願いを知ろうとするようになったと捉えていた（Ⅲ－６－１参照）。このことは、園内研修のテーマを「子どもの『主体的な遊び』とそのための環境構成・援助について考える」としたことが関係している。特に０歳児、１歳児の担任保育者は、「主体的な遊び」を捉えようとする中で、この時期の子どもの姿からその思いや考え、願いを読み取ることが容易ではないとともに大切であることを再認識し、「子どもにとってどうか」という視点から環境構成・援助を振り返ることをより意識するようになったためであると考える。

また、各クラスの子どもの姿や担任保育者の考えを共有できるようになったのは、０歳児クラスから５歳児クラスまでの主担任の保育者が参加して継続的に取り組んだためである。このことは、子どもの育ちや保育の過程を長期的な視点から考え合うためにも貴重な機会となった。

Ⅳ－２　日々の保育をもとにエピソード記録を書く

多くの保育者が、エピソード記録を書く中での自分の変化を捉えていた（Ⅲ－６－１参照）。「取り上げた理由・みんなで検討したいこと」「エピソード名」も書くことで、自分が伝えたいことを意識化し、言語化する機会となったことが関係していると考える。また、ＳＯＡＰの視点を意識することで、子どもの姿をもとにした保育の過程について考えやすく、言語化しやすくなったことも関係していると考える。その中で、「できなかったことや、問題と感じたことを主に書いていることに気づいた」(表16参照）等、自分の子ども理解の枠組みを意識化し（岡花他, 2009)、問い直した保育者もいた。

園内研修を重ねるうちに、エピソード記録がわかりやすくなっていったのは、当初は筆者からの様々な質問によって、保育を見ていない他者にも伝わりやすく言語化することを意識したためである。しかし、その後に子どもの姿についての読み取りや願いも明確に記述されるようになったのは、他の保育者からも質問されること、他の保育者のエピソード記録や、エピソード記録をもとに語られることを通して、子どもの姿をもとにした保育について一緒に考え続けたことも関係していると考える。

Ⅳ－３　園内研修でエピソード記録をもとに話し合う

園内研修では、「取り上げた理由・みんなで検討したいこと」「エピソード名」に表れた保育者の問題意識もふまえ、エピソード記録をもとに話し合いをした。どの保育者も当初はエピソード記録をそのまま読んで紹介することが多かったが、次第に記録にないことも補足して語ることが増え、エピソードの内容がよりわかりやすくなっていった。そのことで、他の保育者からも取り上げた場面や状況、その子どもの日頃の姿、それまでの姿等についての質問がさらに増え、他の保育者が見たその子どもの姿も担任保育者に伝えるようになっていった。このような話し合いの中で、「気づいていない、伝わっていない大事なことに気づく」保育者もいた（表15参照)。

特に５歳児についての話し合いでは、この子どもたちの担任経験がある保育者が多いこともあり、担任当時に捉えた一人一人の子どもの姿も振り返って伝え合いながら、どのような経験をしてその子どもの今の姿があるのかを考えることができ、今後どのような経験が必要かについても話し合いやすかった。そして、話し合い、共有したこともふまえて子どもたちに関わった結果、変化や成長を確認できたことでも、子どもの育ちや保育の過程を言語化して共有することの大切さを実感したと考える。

このような話し合いは、どのクラスでも共通して大切にしたいことを確認し、共有する機会にもなっていた。また、「共感により安心」することができたことで、日頃の保育の中でも「伝えなくてはいけない大事なことを伝えられるようになった」という保育者もいた（表15参照)。

３歳未満児クラスの担任保育者は、第１回のポートフォリオ記録から、自分のクラスでは担任保育者間での共有ができているだろうかと記述しており、日頃から持ち続けていた問題意識が園内研修の中でさらに明確になっていた。このように、保育者の問題意識にそった話し合いができたことが、園内研修での気づきを日々の保育にいかすことにもつながったと考える。

Ⅳ－４　ＳＯＡＰの視点や「具体化を促す問い」の活用

園内研修の中で「本質的な諸相への気づき」(Korthagen et al., 2001）に至り、「行為の選択肢の拡大」「さらなる試み」へとつながったと捉えられた保育者もいた。ＳＯＡＰの視点や「具体化を促す問い」を意識し、子どもの姿をもとにその思い、考え、願いを読み取ろうとし、「子どもにとってどうか」という視点から自分の保育について振り返ることを繰り返したためである。例えば、２歳児クラスＣ先生は、対応に悩む子どもたちについて話し合う中で、「子どもたちの側から考えると」と問いかけられたことで、「私の中では合間の自由な遊びという感覚でしかなかった」と気づき、一人一人の子どもの姿を

よく見るようになった。その中で「時ならない時に園庭に飛び出していく子どもたち」にも「やりたいこと」があるのかも知れないと思うようになり、一緒に遊ぶ中で「“何度かした遊びをまたしたい”という思いを持っていること」に気づいた。そして、子どもたちの「本当の願いや思いを聞きながら、担任間で共有していきたい」と考えるようになっていった。

５歳児クラスＦ先生は、「バスケット」の遊びの中で子どもたちの変化や成長を感じ、クラスの活動にもしたいと考えていた。しかし、子どもたちが経験していることについて考え合う中で、クラスの活動にする必要があるのか問いかけられたことで、改めて今子どもたちに必要な経験について考えることになった。そして、自分の気づきをもとに、「みんなで一緒に遊ぶ方がよい」と考え過ぎる同じクラスの担任保育者に「子どもにとってどうか」という視点から考えた援助について助言するようにもなっていた。

Ⅳ－５　園内研修後にポートフォリオ記録を書く

毎回の園内研修後には、ポートフォリオ用紙に「気づき」「気づきを今後の保育にどのようにいかしていきたいか」を書くようにした。この記録を書く際に、保育者はこれまでの記録を読み返すこともでき（表６参照）、園内研修での気づきを日々の保育にいかすこと、実際にいかすことができたかを振り返ることを促したと考える。

Ⅳ－６　同じクラスの担任保育者とも共有する場作り

３歳未満児クラスの担任保育者は、担任保育者間での共有に問題意識を持っていたが、そのための時間の確保は容易でなかった。しかし、園長・主任の提案でエピソード記録をもとにしたクラス会議の時間を確保したことで、その機会が得られた。また、各自でエピソード記録を読み考えたことをまとめるという準備もしたことで、どの保育者の思いや考えも聞きながらクラス会議をすることができた。このような機会を得たことは、日々の保育の中で子どもの姿に基づく保育を担任保育者間で共有していきたいという思いをさらに強めることになっていた。

Ⅳ－７　今後の課題

この園内研修には次年度も取り組む。今後は、主担任の保育者が子どもの姿に基づく保育を他の担任保育者と共有するための方法について、さらに検討していきたい。

注

１）「具体化を促す問い」の部分は、村井他（2020）のワークシートを参考にし、Ａ・Ｐの部分は第６回のみ加えた。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所（2019）第３回幼児教育・保育についての基本調査

河邉貴子（2019ａ）「驚き」や「喜び」を記録し、子どもの育ちを読み取って、次の援助につなげる　ベネッセ次世代育成研究所　これからの幼児教育　2019年春号　2-5

河邉貴子（2019ｂ）保育の計画につながる保育記録とは－ＳＯＡＰ記録が促す「理解から援助へ」の過程－　子ども学　７　141-160

Korthagen, F. A. J., Koster, B., Lagerwerf, B. & Wubbels, T.（2001）*Linking practice and theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education*. Routledge.（武田信子監訳（2010）教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティックアプローチ　学文社）

鯨岡峻・鯨岡和子（2007）保育のためのエピソード記述入門　ミネルヴァ書房

村井尚子・坂田哲人・今井豊彦・落合陽子・松野敬（2020）保育実践への協同的な省察の効果への実証的研究（１）　日本保育学会第73回大会発表論文集　621-622

岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春（2009）「エピソード記述」による保育実践の省察－保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討－　広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要　37　229-237

関岡貴之・河邉貴子・多賀真弓・永田陽子（2020）「ＳＯＡＰ記録」を使った園内研修の可能性について　全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　第10回幼児教育実践学会　口頭発表概要　私幼時報　432 6-7

津守真（1997）保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－　ミネルヴァ書房　293-294

謝辞

本研究にご協力いただきました保育園の先生方に心よりお礼申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（Ｃ）「子どもの姿に基づく保育プロセスの言語化促進のための支援についての研究」（課題番号22K02407）の助成を受けている。

また、本研究は日本保育文化学会第９回大会（2023）における口頭発表「子どもの姿に基づく保育プロセスを共有するための園内研修」に大幅な加筆修正をしたものである。